

目次

第一編

植村清二

第一章 明治維新と西洋文明の摂取……………

一

一 明治維新と開国の国是(一) 二 福沢諭吉の事業(三)

三 外人教師の招聘(六) 四 留学生の派遣(一一)

五 外国圖書の輸入(一六)

第二章 早矢仕有的の出身……………

二

一 早矢仕有的の郷里(二一)

二 早矢仕有的の家系とその青年時代(二四)

三 有的の青年時代(二五)

四 江戸における早矢仕有的(二六)

五 有的と福沢諭吉(二九)

第三章 丸屋商社の創立 三二

- 一 有的横浜に赴く (三二)
- 二 丸屋書店の開業 (三四)
- 三 丸善の名称 (三五)
- 四 「丸屋商社之記」 (四二)

第四章 丸屋商社の発展 五〇

- 一 丸善初期の營業狀態 (五〇)
- 二 東京支店の開業 (五四)
- 三 清水卯三郎の事業 (五七)
- 四 大阪支店の開業 (五九)
- 五 京都及び名古屋支店の開業 (六四)
- 六 丸善の火災 (六六)

第五章 金融機關の整備と丸家銀行の設立 六八

- 一 細流会社の設立 (六八)
- 二 交銀私局の設立 (七二)
- 三 丸家銀行 (七五)

第六章 貿易商会の設立と中西屋の開店 八二

- 一 貿易商会の設立 (八二)
- 二 貿易商会の營業 (八八)
- 三 丸善為換店の設立 (九一)
- 四 中西屋の開店 (九四)

第七章 中村道太と帳合の法 九七

- 一 中村道太の経歴 (九七)
- 二 「帳合の法」の翻譯 (一〇〇)
- 三 丸善の簿記講習 (一〇二)
- 四 中村道太の失脚 (一〇五)

第八章 創業の元勳 一二二

一 三次半七と沢井秀造（一二二） 二 大塚熊吉（一二五）

三 鬼頭良助、柴田安藏、金沢廉吉、伊村克巳（一二七）

四 物故者の追薦会（一二八）

第九章 洋書の輸入 一二三

一 慶応義塾の日課表（一二三）

二 ウエーランドの経済学と倫理学（一二四）

三 カッケンボスの諸著書（一二九）

四 パーレーの万国史（一三四）

五 スウィントン及びフィッシャーの万国史（一三八）

六 バックル及びギゾーの文明史（一四一）

七 ウェブスターの辞書（一四六）

八 「東京新繁昌記」の記事（一五〇）

九 三菱商業学校の購入図書（一五二）

一〇 明治十六年の丸善洋書販売目録（一五四）

第十章 初期の出版事業(一) 一六三

- 一 丸善最初の出版物 (一六三)
- 二 明治十年代の出版物 (一六九)
- 三 「生理学」と「和洋対曆表」 (一七七)
- 四 薩隅煙草録その他 (一八一) 五 新体詩抄 (一八七)
- 六 文部省「百科全書」 (一九五) 七 「想夫恋」 (二〇三)
- 八 定期刊行物 (二〇四)

第十一章 武蔵屋本と早矢仕民治 二〇八

- 一 「やまと文範」と「近松著作全書」 (二〇八)
- 二 早矢仕民治と武蔵屋本の発行 (二〇九)
- 三 武蔵屋本の模倣 (二一四)

第十二章 初期の出版事業(二) 二一九

- 一 辞書及び教科書 (二一九)
- 二 ストレンジの「戸外競技」 (二二三)
- 三 志賀重昂の「世界史」とディキンズの「忠臣蔵」 (二二五)
- 四 ジョセフ・ヒコの自叙伝 (二二七)

五 欧文の镌刻書 (二三〇)

第十三章 丸善本店の店舗と店員 二三四

一 丸善本店の位置と構造 (二三四) 二 丸善の二階 (二四一)

三 店舗の模様替え (二四四) 四 店員の生活 (二四五)

五 運輸と通信 (二五一)

第十四章 唐物店と工作部 二五五

一 唐物店の開業と新燧社 (二五五)

二 王子製紙との関係 (二五九)

三 当時の洋品の種類と商況の一斑 (二六三)

四 菱屋の営業 (二七〇)

五 工作部の設置とインキの製造 (二七二)

第十五章 丸家銀行の破綻 二七八

一 緊縮政策と景気の変動 (二七八)

二 丸家銀行の破綻と金原明善の努力 (二八〇)

三 貿易商会の倒産 (二八六)

第十六章 丸善の整理と再建 二八九

- 一 丸善の金融途絶 (二八九)
- 二 内外の再建援助 (二九二)
- 三 松下社長の整理 (二九四)
- 四 整理の遅延 (二九七)
- 五 金原明善の努力と整理の完成 (三〇〇)

第十七章 早矢仕有的の逝去 三〇七

- 一 早矢仕有的の死 (三〇七)
- 二 有的の政治的活動 (三一〇)
- 三 有的の人物 (三一五)
- 四 有的の文藻 (三一七)
- 五 晩年の有的 (三二一)
- 六 有的の子孫 (三二三)

第二編

木村 毅

第一章 日清談判破裂して (上) 三二五

- 一 「新遠東」の誕生 (三二五)
- 二 条約改正と内地雑居 (三二六)
- 三 「丸善社史」の欠漏 (三二八)
- 四 日清戦争をめぐる (三三〇)
- 五 女流の読書会 (三三六)
- 六 翻訳された西洋小説 (三三八)

第二章 日清談判破裂して(下)三四四

一 雑誌簇生時代(三四四) 二 戦争前後の英文学界(三四七)

三 学術と社会問題書籍(三五四)

四 立て直しの新陣形(三五七)

第三章 学燈(鐙)の誕生三六三

一 初号の体裁(三六三)

二 「ヒロイック・ジャパン」(三六七)

三 万年筆のこと(三六九) 四 銃剣の製作販売(三七二)

五 ケーベル博士の哲学講義(三七六)

六 輸入目こぼしの忠臣蔵(三八一)

七 最初の露和辞典(三八八)

第四章 政治年鑑三九三

一 政治年鑑(三九三) 二 「政治年鑑」一〇〇年史(三九六)

三 ゴラとヴィゼッテリイ版(四〇〇)

四 渡米径路の二系統(四〇三)

第五章 著作権法公布 四〇八

一 起死回生(四〇八) 二 タイプライター(四一一)

三 ヴィクトリヤン・ライヤー(四一四)

四 万国著作権同盟(四一七)

五 ナシヨナル・リーダー・リターダ―翻刻問題について難者に答う(四一九)

六 二十世紀はいつから始まるか(四二三)

第六章 十九世紀終る 四二六

一 唐物販売(四二六) 二 小柳津要人伝(四三一)

三 ドイツ文学書あらわる(四三五)

四 逝く世紀への記念(四三六)

第七章 内田魯庵入社 四三九

一 つんどく礼賛論(四三九) 二 滝廉太郎の出世作(四四一)

三 内田不知庵(魯庵)入社(四四二)

四 「店頭の半日」(四四八)

第八章 十九世紀名著選 四五七

- 一 学界への質問 (四五七) 二 知識人総動員の偉観 (四六〇)
 - 三 高山樗牛の批評 (四六六) 四 世界的反響 (四六八)
 - 五 魯庵の新着書紹介ぶり (四七三)
 - 六 トルストイの「復活」 (四八〇)
 - 七 フリー・エイジ・プレス (四八三)
 - 八 ドウホポール教徒 (四八七) 九 英皇戴冠式 (四九三)
- 第九章 ブリタニカ月賦販売戦 四九五

- 一 「学燈」から「学鑑」へ (四九五)
 - 二 日英文化同盟 (四九九) 三 ブリタニカの申込層 (五〇〇)
 - 四 時代的変遷 (五〇三)
 - 五 センチュリイ字典と尾崎紅葉 (五〇六)
 - 六 「学鑑」特別号 (五一二) 七 ニイチエ論争 (五三四)
 - 八 邦書の大出版 (五四四) 九 紅紫繽紛の店頭 (五四九)
- 第十章 日露戦争 五五三

- 一 信用状拒絶 (五五三) 二 乃木陣中の佳話 (五五五)

三 大陸嗜好への転移(五五八)

四 「君死に給ふことなかれ」の藍本(五六四)

五 ラフカディオ・ヘルンの死(五七三)

第十一章 駝鳥のボーア五七五

一 元旦の旅順陥落(五七五) 二 漱石の登用(五七七)

三 京都支店開設(五七九) 四 日本人の海外信用(五八二)

五 ウェブスター字典と福沢諭吉(五八四)

六 クリスマス・カード(五八九)

第十二章 叢書きそい起る五九五

一 一等国(五九五) 二 エヴェリマン叢書(五九六)

三 レクラム叢書(六〇二) 四 自然主義の外護者(六一〇)

五 文章世界の「文章顧問」(六一二)

第十三章 ケンプエルとシーボルト六一五

一 本店と京都支店(六一五) 二 ネルソン百科全書(六一八)

三 稀観書双璧(六二二) 四 モウバッサン(六二六)

五 周作人（六二八）

第十四章

創立四十年

.....六三二

一 振替番号第五番（六三二） 二 洋品部の盛況（六三三）

三 書棚概観（六三九） 四 「復活」譚訳（六五五）

五 「ジャン・クリストフ」（六五七）

第十五章

灰燼十萬卷

.....六五九

一 丸善飯店の火災（六五九） 二 「灰燼十萬卷」（六六一）

三 歴史家の世界歴史（六六七）

四 モウパッサン全集（六六九） 五 興味ある雑報（六七二）

六 読書家としての伊藤と大隈（六七四）

第十六章

明暗二重奏

.....六七八

一 新築丸善の威容（六七八） 二 「白樺」発行（六八〇）

三 印象派と後期印象派（六八五） 四 平民社（六八八）

五 逝ける人々（六九二） 六 洋書五十選（六九六）

第十七章 大逆事件とクリスマス……………七〇二

- 一 初洋行社員（七〇二）
- 二 危ない綱渡り（七〇四）
- 三 丸善と大逆事件（七〇九）
- 四 逝ける人々（七一四）
- 五 クリスマス流行（七一一）

第十八章 明治の終焉……………七二二

- 一 ロンドンの取引先七十軒（七二二）
- 二 日本に読書界ありや（七二四）
- 三 ネルソン百科全書（七二八）
- 四 明治天皇崩御（七三〇）
- 五 補遺（七三三）
- 六 雑貨品（七四五）
- 七 重役陣の移動（七四八）